因陀羅筆「観音図」について

李 宜蓁（九州大学大学院）

元時代の禅僧・因陀羅（生没年不詳）は、一連の国宝「禅機図断簡」（アーティゾン美術館、根津美術館、東京国立博物館、静嘉堂文庫美術館、畠山記念館）の作者として知られているが、1998 年の大和文華館における特別展「元時代の絵画―モンゴル世界帝国の一世紀」で、従来、牧谿筆とされてきた個人蔵の「観音図」が因陀羅の作として紹介された。本作は、「禅機図断簡」とは異なる画風をしめし、一般の観音図にはみられない襤褸をまとった観音の姿が特徴的である。本発表では、制作背景、図像の意味、画風の選択という三つの側面から、本作が制作された経緯を明らかにし、因陀羅の画業における位置づけを試みる。

本作は、「壬梵因為千佛□法師□筆時延祐改元季□□下」と判読される落款から、延祐元年（1314）に「千佛□法師」のために制作されたことが知れ、さらに同時期の禅僧・中峰明本（1263-1323）が撰した一文を杭州明慶寺の住持・虎巖嗣良（生没年不詳）が書した賛文を伴う点で注目される。本作は、因陀羅の晩年作とされる「禅機図断簡」より早く制作された作品であり、この時期の因陀羅は、『君台観左右帳記』にみられる記載、同時期に活躍していた禅僧・元叟行端（1255-1341）との関係性、および明本と嗣良の経歴から、杭州の仏教文化圏で活動していたことが推定できる。

本作に描かれた観音は、一般の観音図によくみられる光背、宝冠、瓔珞、蓮台等がいずれも省かれていることで、その姿は世俗の人間を彷彿させ、さらに襤褸をまとうことで、貧民さながらの印象を与えている。賛文は、唐時代の禅僧・香厳智閑（?-898）による偈を引用することで、観音の形姿が極限に達した状態である「貧」の表象であり、そのあり方自体に悟りの境地を重ねている点で、「教禅一致」の思想を込めた如来禅の思想が示されていると考えられる。本作の落款に記された「千佛□法師」なる人物は、禅師と律師に対して、文字・経論を考究する法師を名乗る教僧であることから、本作は因陀羅が依頼者である「千佛□法師」の立場を理解したうえで制作したものといえよう。さらに本作は、慈眼をもって観者に対する一般的な観音図とは異なり、やぶにらみをしている。これは「廓然無聖（心が広くさっぱりした状態で、いかなる執着も生まない大悟の境地からみれば、そこには凡と聖との区別さえもない）」という達磨の教えに通じるもので、禅僧としての因陀羅の宗教観を反映した表現と考えられる。

また本作では、衣紋線が太く肉身線が繊細である点で「禅機図断簡」と異なる。本作にみられる衣紋線に沿って墨で暈しを加える描き方は「禅機図断簡」にはみられないものである。「禅機図断簡」中の「寒山拾得図」には「釋氏陀羅禅余幻墨」という印章が捺してあるため、「禅機図断簡」は因陀羅の「禅余幻墨」とみてよい。それに対して、教僧のために制作された本作は、因陀羅の画業において非「禅余幻墨」として位置づけられ、あえて「禅機図断簡」と異なる画風を採用したと解釈できるだろう。